

イスラムとの対話

第1回 「現代社会とイスラム」



1997年5月20日（火）

於：帝国ホテル

主催：笹川平和財団



目次

田淵節也・笹川平和財団会長挨拶	1
第1部 湯川教授の講演	2
はじめに	2
1. 宗教としてのイスラム	
キリスト教・ユダヤ教との近親性—それゆえの敵対	2
「宗教」を越える宗教—宗教的倫理+社会規範	3
イスラム的なものの考え方—一元的思考（タウヒード）	4
個人主義（ムスリム）と共同体主義（ウンマ）のバランス	5
純粋主義と寛容主義の両面	5
2. 思想としてのイスラム	
律法主義的思想—神の法（シャリーア）—ユダヤ思想との比較	6
ヘレニズム哲学的思想—アリストテレスの影響—神学と哲学の融和と対立	7
神秘主義的思想—神智学—自我の消滅—東洋思想との関連	7
3. 文明としてのイスラム	
普遍主義—エコロジカルに異なる地域とその文明伝統の取り組み	7
多様性（地域の生態と文化伝統の多様性の維持）と 統一性（ムスリムとしての連帯感・一体感）	8
4. イスラムと現代世界	
歴史的な発展—地理的拡大とムスリム人口の増大	8
現代のイスラムの状況—歴史的なイスラム圏を越えて広がりつつあるイスラム	9
世界の諸問題とイスラム	9
時代・地域による「イスラム」の受け取り方の違い	9
物質主義的精神への反発	10
現代ムスリムのかかえる矛盾：生活水準の向上と宗教性・倫理性の維持	10
第2部 質疑応答	11
おわりに	15
付録（湯川教授講演レジメ）	16

**講師：湯川武（ゆかわ たけし）教授
プロフィール**

1941年生まれ
慶應義塾大学文学部卒業
エジプト、アメリカ留学
現在、慶應義塾大学商学部教授

**モデレーター：池田明史（いけだ あきふみ）
助教授プロフィール**

1955年生まれ
東北大学法学部卒業
アジア経済研究所、イギリス・イスラエル留学を経て、
現在、東洋英和女学院大学社会学部助教授

田淵節也・笹川平和財団会長挨拶

みなさんおはようございます。本日はご多忙中、朝食会においでいただきありがとうございます。おかげさまで笹川平和財団も昨年をもって10周年を迎えることができました。

そして、これもみなさまのご協力の賜であることは申すまでもありません。

さて、私ども10周年を記念して、いくつかの新しい試みを考えております。この朝食会はその1つでございます。冷戦後の激動する現代の国際環境において、世界の各地域でそれぞれの国家や社会をつき動かす新しいダイナミズムが見かけられ、その分析や理解が不可欠となってきました。

そこで、笹川平和財団では、このようなダイナミズムの代表例でありながら、日本には疎遠とされている「イスラム」を取り上げようと考えました。

西側の脅威としての「イスラム原理主義」論や、西側の価値観とは相容れないイスラム世界と西洋間の「文明の衝突」論の出現などに鑑み、イスラム理解の一助として、基本的な知識、西側の価値観とイスラム世界の同質的な発想や共通点の解明などを目指したいと思います。特に今日的な事件や現象に照らしながら時事的、カレントトピックス的に考えていくために、朝食会の形式で企画いたしました。

4回シリーズのうち本日は第1回でございますが、まず「現代世界とイスラム」について学んでいこうと考えております。

第2回は中東紛争とイスラム、第3回はムスリム（イスラム教の信者）とイスラムー原理主義は存在するかー、第4回は民主主義とイスラムーイスラムは「文明」かーを予定いたしております。

なお、第1回の本日は、講師に慶応大学商学部教授の湯川武先生、モデレーターは東洋英和女学院大学社会学部助教授の池田明史先生にお願いしております。よろしくお願いいたします。

かさねがさね、早朝よりみなさまのご参加感謝いたします。

第1部 湯川教授の講演

はじめに

池田 ただいまご紹介いただきました池田です。この4回の朝食会を通じてモデレーターの役割を仰せつかっております。私の専門は国際政治で、一応中東をフィールドとしております。特に現在は中東和平プロセスを主要なテーマとして追いかけております。私自身は必ずしもイスラムが専門ではないのですが、どうしてもイスラム抜きに中東の政治を見ることはできないわけで、大きな関心を持ってながめております。そういった立場から見ると我々の回りにあるイスラムの情報というのは、非常に単純に2つに分かれるのではないかと思います。

1つは「イスラムは問題だ」という立場です。先ほどの田淵会長のご説明にもあったような文明間の衝突というような図式で、非常に対決的な見方です。もう1つは問題どころではなく「イスラムは解答だ」という見方です。西洋近代の行き詰まりに対して、イスラムこそがすべての解決を用意するのだという見方です。

この異なる2つの見解の間で、我々はイスラムをどのように見たらいいのかを常に考えざるを得ない状況にあります。一方の見方は、欧米的な認識のプリズムを通してイスラムを見ているわけです。私はイスラムには実際に問題が多々あるのだと思いますが、欧米的な認識のプリズムを通して見ると問題の所在そのものがぼやけてしまうような気がします。このシリーズを通して、問題だとすれば何が問題なのか、イスラム自身がその問題をどのように捉えようとしているのかについて考えたいと思います。入門編としまして、「イスラムとは基本的にどういうものか」について、誠に適任の講師をお迎えしましたのでご紹介いたします。

湯川先生は現在慶応大学商学部で教鞭をとっておられますが、井筒俊彦先生の系譜ともつながる日本を代表するイスラム学者であられまして、カイロアメリカ大学、プリンストン大学双方に留学された経験をお持ちです。したがって、イスラムは問題だという立場も、イスラムは解決だという立場も、どちらも熟知されています。ご専門はイスラムの思想史と伺っておりますが、それに限らずイスラム全体を俯瞰される研究を多々発表しておられます。では湯川先生お願いいたします。

湯川 ご紹介いただきました湯川です。今日は第1回目ということで総論的なこととお話したいと思っております。おそらく2回目以降は政治や社会・経済の問題など生々しい話も出てくると思っておりますが、今日はやや抽象的になるかもしれません。現実に関心していることの基層に何があるかということのご理解に役に立てばと思います。

イスラムを考える場合にいろいろな面から捉えることができますが、ここでは3つの側面から考えてみたいと思います。1つは宗教としてのイスラム、2つ目は思想としてのイスラム、3つ目は文明としてのイスラムです。

1. 宗教としてのイスラム

キリスト教・ユダヤ教との近親性—それゆえの敵対

まず宗教としてのイスラムについてですが、宗教というとキリスト教、仏教、あるいは神道などが思い浮かびますが、イスラムに最も近い宗教はキリスト教でありユダヤ教です。なぜ近いかというと、この3つは全く同じ神を信じており、しかも日本の神道のようにたくさん神様がいらっしゃるわけではなく、唯一の神を信じる一神教なのです。歴史的にはユダヤ教が最初に生まれて、次にキリスト

教、そして何百年か経ってイスラムが生まれたわけですが、キリスト教はユダヤ教のかんりの部分を受け継いでおり、教祖とも言えるイエス・キリストはユダヤ教徒なんです。異端のユダヤ教徒です。それから受け継いだものはキリスト教では「旧約聖書」と言っており、ユダヤ教徒は元々は自分たちのものだから単に「聖書」と言っています。キリスト教の人はそれを正しいけれども古いから「旧約聖書」と言い、自分たちの聖書を「新約聖書」と言って、両方とも認めています。

その後生まれたイスラムはそれを受け継ぎ、旧約聖書も新約聖書も認めて、さらに自分たちのものである「コーラン」を新たに持つようになります。ですから内容的には重なる部分がたくさんあります。もちろん古くからいたユダヤ教徒たちにすればキリスト教は新興宗教であり、自分たちから飛び出していったものですから、キリスト教的な捉え方は否定しています。さらに後に出てきたイスラムの預言者であるムハンマド（一般にはマホメットとも言われていますが）という人物を否定するわけです。特に世界的な影響力を持つのはキリスト教ですが、宗教的なものの考え方は全く同じと言っていいでしょう。

イスラムの信徒をムスリムと言いますが、ムスリムが信ずべきことがたくさんあります。それらをまとめると大きく6つになります。それは、①唯一の神を信ぜよ、②天使の存在を信ぜよ、③神の啓示を信ぜよ、④神の教えを人々に伝える預言者の存在を信ぜよ、⑤この世は有限であってその先には次の世が来るということ、つまり来世を信ぜよ、⑥すべてを支配する神の力を信ぜよ、という6つです。私がお話をキリスト教の修道院でしたところ、「私たちの教えと同じである。知らなかった」と驚かれました。このようにキリスト教と全く同じなのです。基本的にはユダヤ教とも同じです。ですから大変近い宗教なのです。その近さゆえに、それを信じている人々の間では一種の近親憎悪的な関係が生じました。もちろんこ

れは様々な歴史がからんで起こったわけですが…。お互いに同じ事を信じてはいても、枝分かれした先のところで、また現実の生活の中では非常に強いライバル意識を持っているわけです。

これを歴史の面で見ますと、西洋とイスラム社会、あるいはムスリムの社会との対立であり、そもそもは十字軍時代から始まったと言われていいます。十字軍の時代はイスラム世界の方が文明が高かったのも、すみっこの方でちょこちょこやってくるな、という程度だったのですが、19世紀以降に圧倒的にヨーロッパが強くなってくると、ムスリムたちは非常に強く反西洋という形で、また自分たちがつぶされないための自己主張としてイスラムというものを意識するようになったのです。そういう歴史的な関係は、宗教として中味が近いというところにも原因があるのです。

「宗教」を越える宗教－宗教的倫理＋社会規範

そういう性格を持ったイスラムですが、我々が考える宗教とはやや性格が異なります。日本の社会においては信仰の自由は憲法で保障されていて、人々の宗教生活は個人的な側面に限られています。「宗教は心の問題であり、一人ひとり正しいと思うことを信じて、それにのっとって個人の行動をしてください、社会的にはそれを表に出さないでください」という形で、オウム真理教のように徒党を組んで何か悪いことをしないよう切り離してあるわけです。そのように我々は宗教というと、心と結びつけて考えます。

ところがイスラムは宗教なのですが、それだけではない面があります。イスラムでは宗教的なものの考え方・倫理だけを教えているわけではなく、人間は心で信じることを社会でもしなさいというような社会規範的なことまですべて含んでいます。よくお聞きになる言葉で「イスラム法」というのがあります。現実にはその通りやっている国はないのですが、イスラム法というのはまず最初に「人は神を信ぜよ」というところから始まり、

以下ずっといろいろな項目があつて、「商売の時の契約はどうしなさい」という項目から、戦争の時の捕虜の取扱い、現代的な言葉で言えば戦時国際法にあたるようなものまで含んでいます。人間が関わるものすべてに関わってくるのがイスラム法であり、イスラムという宗教なのです。

これが他の宗教と大きく異なるところです。特に兄弟宗教であるキリスト教と大変違うところです。キリスト教は新約聖書にも出ていますが、「カエサルのはカエサルに」、つまり当時のローマ皇帝の権限の及ぶ範囲のことについては自分たちは口出ししないという政教分離がはっきりと謳われています。自分たちは心の世界のみを何とかしようというふんぎりを最初につけ、やってきているわけです。

イスラムは歴史的な状況もありますが、そのところを逆に考えました。人間一人ひとりがこういうふう考えるのならば、社会的にもしなさいと最初から言っているわけですから、キリスト教の政教分離とは違います。ユダヤ教は実は法という考え方が非常にしっかりしており、イスラムに大きな影響を与えたと言われていますが、神の法を守らなければいけないと言っています。ただしユダヤ教とイスラムの非常に大きな違いは、ユダヤ教はユダヤ教徒、一般にはユダヤ人と言っていますが、ユダヤ教徒たちが内側だけでそれをやろうというわけです。いわば民族的な範囲を決めてしまつて、その中でのみ神の法を守ろうというのです。

ユダヤ教の法も実にイスラムに似ていまして、旧約聖書をご覧になった方はよくご存じだと思いますが、最初が神が天地創造をした創世記で、次が出エジプト記といつてモーゼがユダヤの民をエジプトから脱出させてイスラエルに連れて帰るところで、第3～5章に大変細かい法が規定されているんです。こんなことをなぜ決めるのかというほどの細かさです。何かをやる時の台座はどどこから何センチとか、箱を作る時はどうか、テ

ントを張る時はどうか、全部決められているのです。その決め方はイスラムと共通ですが、それが及ぶ範囲はユダヤ教徒だけなんです。ところがイスラムはこれは全人類のものだとしているわけです。そういう宗教を普遍宗教と言いますが、普遍的に全人類がこれを守らないといけないとしているのです。ただし全部がすぐにイスラム教徒になるわけではないですから、そこは順次やっぴいこうという考え方です。そういう意味で我々が考えているような宗教の範囲を超えて、全人類に及ぼさうというのがイスラムの基本的な出発点だと思います。

イスラム的なものの考え方——元的思考（タウヒード）

ではなぜそのように内面的な心の問題と、人間が活動する場である社会の問題をひとつなぎに考えてしまうのか。そういう考え方がイスラムの大きな特徴なんです。それをイスラム用語でタウヒードと言います。タウヒードとは何でも1つに考える、つまり元的思考です。政教分離によって国家と宗教というように2つに分けることを二元主義と言いますが、これはヨーロッパで発達した考え方です。その基本にはキリスト教的な心のあり方と日常的な社会との区別、教会と国家との区別という二元論があつたわけですが、イスラムはそれを最初から分けないで元的に物事を考えました。一神教をつきつめればどうしてもそうなるわけです。「出発点は唯一の神で、その神がすべてを創り支配する。そして最後には神に戻る」という一元論を強く維持している宗教なのです。

イスラムが生まれくる過程で預言者のムハンマドという人物、あるいはその周りの人たちは、アラビア半島のキリスト教徒やユダヤ教徒からたくさんのお話を学びました。その過程で一神教をどれだけ純粹にするかということを一生涯懸命考えたわけです。イスラムから批判するとしたら、キリスト教もユダヤ教も一神教の正しい教えである

が、ユダヤ教はそれを特定の人にだけあてはめるからおかしいし、またキリスト教はイエス・キリストは預言者としてはりっぱな人物だが、神の子としては認められない。もし神が唯一であるなら、神に子供がいるとはどういうことか、唯一であることが崩れてしまうという点です。キリスト教ではそれを三位一体と言っていますが、非常に分かりにくい考え方です。数学の図式で書くと $3=1$ みたいになってしまって、やや難解なところがあります。もちろんキリスト教徒は議論に議論を重ねてそれなりにこなしてきたわけですが、やはり外側から見ると分かりにくい。父なる神と、神の子キリストと、もう1つ聖霊というのがありまして、それはすべて1つの神のアスペクトだという考え方ですが、それはおかしいと、唯一でいいではないか、子供など必要ないと徹底的に一元論を追求したわけです。それがイスラムの大きな特徴です。

個人主義（ムスリム）と共同体主義（ウンマ）のバランス

しかし一元論をとりながらも、実際のイスラムの中にはどうしても二元的になる側面があります。一人ひとりのムスリムは自分の信仰を高めて、最終的には来世の救いを求めるわけです。一人ひとりが神と直面するという性格が強いわけですが、それに対してムスリムたちが集まって共同体を造る、それはイスラムの用語でウンマと申しますが、これは非常に重要な単語で現在も生きている言葉です。そういう共同体と個人とのバランスをどうとればいいのか。これもある種の二元主義なんです。どうすればこれを統一的に見ることができるのか。イスラムとしては宗教的な信念としては非常に強烈な個人主義です。つまり神に直面する一人ひとりの人間が信仰と行為を通じて救われるという考え方ですが、一方ではどのようにお互いが助け合いよりよい社会を造るか、さらには集団的な救済が得られるかという考え方も出てく

るわけで、そのバランスをとらないといけないわけです。

このバランスは比較的イスラムの教えの中に活かされており、ムスリムたちが様々な場面で連帯感を感じとれるように、宗教的な儀式の中に取り込まれています。例として2つ挙げますと、1つはイスラムの礼拝の仕方です。礼拝の仕方は非常に単純な動作の繰り返しで、途中にちょっと言葉が入ります。義務としては1日5回しなければなりません。この礼拝は小さい時に一度教われば誰にでもできます。たとえばインドネシアのムスリムが旅をしてモロッコにいても、その場でみんなと一緒にできるわけで、これは仲間意識を高めるのに有効です。世界中の宗教でもこれは珍しいことです。キリスト教は現地言語主義をとっていますから、言葉が違えば何を言っているのかわかりませんし、宗派が違えば儀式のやり方も少しづつ違うから参加できません。しかしイスラム教徒はどこに行っても礼拝に簡単に参加できるという点で、共同体主義を固めているんだとされています。

もう1つはメッカ巡礼です。これにも決まった儀式があります。白いシーツを2枚に裂いて、1枚は腰に巻き、1枚は肩から下げるという非常に質素な格好で巡礼をする。それはお金持ちだろうが貧乏だろうと一緒に、同じムスリムとして共通のことは行います。それによって自分たちの仲間意識を確認できるわけです。このように共同体に所属しているという意識を高めるといって、そういうバランスの取り方がうまいとされています。

純粹主義と寛容主義の両面

それからもう1つ、考え方としてイスラムに特徴的なのは純粹主義という立場です。これは政治的な過激行動に出た場合には原理主義と言われるものです。純粹主義とは何かと申しますと、イスラムではコーランは神の言葉だと信じられています。逆にいうと、コーランが神の言葉だと信じて

いる人がムスリムなんです。客観的にそうであるかないかという議論は不毛な議論であり、彼らは神の言葉であるがゆえにそのまま受け取らなければいけない。そういう意味の純粹主義です。そこが世界の他の宗教の教典と違うところです。他の宗教の教典は弟子など人間が書いたものですから、解釈の違いや変わっていく余地があるわけですが、イスラムの場合は神の言葉そのものですから、変えてはいけないものなのです。

しかしイスラムは一方では神の言葉として、「キリスト教もユダヤ教も認めなさい。あまり押し付けてはいけない」ということがたくさん出てきます。このようにいろいろなものを受け入れる寛容な部分もあるわけです。それを寛容主義と言います。イスラムはこのようにいろいろなものを取り込みながら拡大してきたわけですが、純粹主義と寛容主義は矛盾する可能性があります。歴史的に見ると、ある時は純粹主義が強くなりある時は寛容主義が強くなっている。一般的に言いますと純粹主義、現代語でいうと原理主義と言ってもいいと思いますが、これはイスラムの危機の時代に強くなると言われています。論理的には当然で、危機感を抱いた時には自分たちのよりどころを強く守ろうとするわけです。反対に余裕がある時には寛容主義になります。

2. 思想としてのイスラム

律法主義的思想－神の法（シャリーア）－ユダヤ思想との比較

2番目にイスラムは宗教ではありますが、それを規範にしたイスラム的な思想、これは人類の思想史の中で非常に大きな地位を占めていますが、そういった思想を発達させました。イスラム的な思想には3つの側面があると言われています。1つは律法主義的思想です。法律をひっくり返して律法と言いますが、実はこれはユダヤ教の用語です。法律とは国家が定める狭い範囲のものであり、律法はもっと広い範囲のものであります。たとえば神の

掟とか神の教えなどを全部含んだ概念として律法という言葉を使います。これをイスラムに当てはめていること自体、ユダヤ教の影響がいかに大きいかの証拠になると思いますが、つまりは神の法をきちんと守ろうということです。もちろん神の法といっても神が何から何まで示したわけではありません。神の法として書かれたものとしては「モーゼの十戒」があります。これはモーゼが石版に書かれた神の言葉を受けたものです。「汝殺すなかれ」とか「汝姦淫するなかれ」というような言葉が10書かれたわけです。そういうものを含めて、イスラムはすべて認めています。

コーランは預言者のムハンマドという人物を通して発せられる神の言葉を、弟子たちが聞き取って編纂したものだと言われています。そういうものですから普通の法律とは違い、第何章・第何条とは書いてありません。いろんなことがばらばらに出て来るのを人間が編集したわけですが、起源は神であり、それを基に広げていったものだと考えられています。その神の法をアラビア語でシャリーアと言います。シャリーアとは元々「水場に行く道」という意味だそうですが、砂漠で乾いている人が水場に行く道、つまり命が救われる「救いの道」なのです。それをヨーロッパの言葉で「イスラミック・ロー」と訳したのですが、それが誤解の元で、彼らはイスラム法は我々の法律と同じじゃないかと言います。本来は「救いに至る道」ですからもっと幅が広いわけです。そういった「救いに至る道」として示されたものをまとめて、きちんと守ろうという考え方を律法主義的思想と言います。これはユダヤ思想と非常に深い関係があると言われています。そしてこれはムスリムたちにとって共通の、大きな意味を持つ思想です。

ヘレニズム哲学的思想－アリストテレスの影響－神学と哲学の融和と対立

もう1つは西洋の「イスラムは問題だ、遅れている、無知蒙昧、非合理的」という見方についてですが、実はヨーロッパ人が自分たちの基だと考えているギリシャ哲学は、イスラム教徒が支配した西アジアから地中海に至る地帯に受け継がれたのです。これは歴史的にも明らかなことです。ヨーロッパ人たちが12世紀から13世紀にかけてアリストテレスにふれ、アリストテレスの論理学を使って、ヨーロッパのルネッサンスの基になるような考え方を整備していくんですが、実はアリストテレスをイスラム教徒たちが受け継いで、そこでいろんな解釈をしたり研究を積み重ねてアラビア語に編纂し、それが12世紀になってラテン語に翻訳されました。それをキリスト教の神学者たちが最初に取り入れたのです。

アリストテレス的な論理、これは近代的な論理に通じるもので、我々も物事を考える時はほとんど同じ線上で考えるわけです。つまりイスラムは非合理的ではなく、理性的・論理的な考え方が深く入っています。8世紀の後半から11世紀にかけてのヘレニズム、ギリシャの遺産、その他様々な知的な遺産というものは深く研究され、アリストテレス、さらにはプラトンの影響も受けています。そういう中で1つの哲学的なものが生まれていきます。

神を信じるという超合理と、物事を人間の理性を使って順番に積み上げて考えるという問題はどうしてもぶつかります。しかしイスラム神学はそこから先はできるだけ論理的に説明しようとしており、様々な宗教の神学体系の中でも、出発点のぞけば最も論理的に構成されていると言われていきます。ヨーロッパでも研究者はそれを知っていますが、それを知らない一般の人たちはイスラムは非合理だと言います。しかし決してそんなことはなく、神学と哲学を融和させているのです。しかし一方では対立もあるという、そういう図式が

あります。

神秘主義的思想－神智学－自我の消滅－東洋思想との関連

イスラムに独自に発展したものに神秘主義的思想があります。井筒俊彦先生という世界的な大学者がありますが、彼の著書にもそれが書かれています。世界中に神秘主義思想はありますが、イスラムの場合は13～14世紀を頂点に、あるいは後の時代まで高度に発達します。一般にはそれを神智学、神を知る学と呼びます。神智学とは神が存在していてその神をいかに知るかという客観的なものの見方ですが、イスラムの場合はそれをさらに超えて、人間が神になってしまう、あるいは人間があらゆるものの中に溶け込んでしまう、つまり自我の消滅が盛んに論じられています。井筒先生が一番強調したのはその自我の消滅、つまり人間が自分の意識を超えて世界全体、宇宙全体と一体化するようなものの考え方です。これは実は西洋的な個というもの、つまり神を客観的に知ろうとする考え方とは異なるわけで、自分がなくなるというのはきわめて東洋的であると言えます。たとえばインドの神秘主義思想や中国の老荘思想、日本の禅につながるようなものです。信仰の個人主義、神と人間が対面して対決するというものとは全く違う側面を持っています。この自我の消滅、神との融和というイスラムの考え方は、先ほどの律法主義とは対立する面もあります。このように思想では大きく3つの流れがあると考えられています。

3. 文明としてのイスラム

普遍主義－エコロジカルに異なる地域とその文明伝統の取り組み

3番目は文明としてのイスラムです。イスラムは一般的な宗教であると同時に、人間の生活でもあります。生活の規範であり、人間関係の結び方であり、社会の運営の仕方を教えているわけです。

が、広く言えば文明です。文明の中心にイスラムがあるわけです。イスラムという言葉はアラビア語でも欧米語でも、いつも2つの意味を持っていて、1つは宗教としてのイスラムであり、もう1つはイスラミック・シビリゼーションという意味でも使います。それはムスリムたち自身もそういう考え方をしています。

文明としてのイスラムの大きな特徴は普遍主義です。どんなものでもイスラムの中に取り入れようという傾向が強いわけです。人間生活を地理的にも内容的にもすべて取り込んでしまう融合的な性格があります。地理的にはインドネシアからモロッコの先、北はモスクワの500キロ先に住民がすべてムスリムという自治共和国がありますし、中央アフリカ、南アフリカにもたくさんいますが、そういった地域に行くとイスラムの匂いがするわけです。それが正にイスラムの包み込む力なのです。気候も言葉も着ている物も違うにもかかわらず、そういう感じがします。

多様性(地域の生態と文化伝統の多様性の維持)と統一性(ムスリムとしての連帯感・一体感)

そういった力がある一方、たとえばインドネシアは90%がムスリムですが、彼らに会ってからバルカンに行ってそこのムスリムに会うとまた随分違う気がします。皮膚の色、言語、文化や考え方も違うし、とても多様なんです。その一方でその人たちがイスラムというものでまとまるというような、統一性と多様性が併存しているような面が特徴です。その中でも統一志向は近代以前は強かったのですが、近代以降はやや崩れています。インドネシアはインドネシアだけ、モロッコはモロッコだけというように、国家単位になりつつあります。にも関わらずイスラム文明は統一志向をいまだに維持していき、ムスリムの連帯感を礼拝の仕方や巡礼といったものを通じて持ちつつ、西洋中心主義に対抗するものとして自分たち自身のイスラムというものを考えています。しか

し、現代ではそれはかなり精神的なレベルでの話です。現実には国家に分かれており、社会が違うわけですからそうならざるをえませんが、精神的なレベルではイスラムの共同体・ウンマが非常に強く生きています。一部のイスラム主義に基づく政治的な活動をする人たち、あるいは政治的なイデオロギーを持っている人たちはウンマを政治の実体にしようとしています。これは簡単にはいかないでしょう。しかし精神的なウンマはいまだに生き続けています。つまり文明としてのイスラムは崩壊していないわけです。

4. イスラムと現代世界

歴史的な発展—地理的拡大とムスリム人口の増大

近代の状況：植民地化の進行—現代の状況：開発途上地域

これまでイスラムの3つの特徴をあげてまいりましたが、それらと現代世界のつながりを考えてみたいと思います。現在のイスラム教徒がたくさん住んでいる世界はアラビア半島から発達して、今や太平洋から大西洋まで、ユーラシア大陸の中央部からアフリカ大陸までと拡大しています。今世界の人口は爆発的に増えていますが、宗教的にはイスラム人口が一番増えています。これは自然増が一番大きいわけですが、自然増だけではない部分も含まれています。

このように地理的には拡大しているながら、現実にはイスラム世界は非常に困難な状況にあり、ほとんどの部分が19世紀から20世紀にかけてヨーロッパの列強の植民地にされています。植民地から解放された第二次世界大戦後はおおむね独立しましたが、独立の仕方は植民地分割線というものに沿っており、自分たちの必然性によって独立したわけではありません。ほとんどはイギリスとフランスが勝手に線を引いたわけで、外交官が地図に定規で線を引いたり、あるいは山や川で区切ったという区切り方なんです。しかし植民地時代に搾取され続け、社会的な発展が伴わないまま無理

やり独立したために、ほとんどが開発途上国と言われる地域に入っています。

現代のイスラムの状況－歴史的なイスラム圏を越えて広がりつつあるイスラム

それにも関わらずイスラム世界は拡大状況にあります。従来のイスラム世界を超えて、ヨーロッパ世界に出稼ぎ移民という形で大量に流れています。フランスではムスリムたちをどうするかという問題が起きています。イギリスもドイツもオーストリアも同様です。

それともう1つ、ヨーロッパの延長として生まれたアメリカ大陸にもたくさんおります。それは時々事件としても起こりますし、移民としても入っています。それだけではなく、アメリカの黒人の中でイスラムに改宗する人が増えています。有名なプロスポーツ選手でアラビア語の名前の人がいます。移民なのかと思っていたらそうではなく、純然たるアフリカ系アメリカ人なんですね。ロバートがアブドゥラに変わって大活躍するようなことが多くあります。そういう意味で現代の状況は政治的・経済的・社会的には非常に苦しいにも関わらず、イスラムは拡大しているのです。ある意味では世界がイスラム化しつつあるとも言えます。

世界の諸問題とイスラム

そういう中でムスリムたちも我々と同じように色々な問題を抱え込んでおります。イスラムを信仰している民族は今までの植民地状態、あるいは大きな国の中に編入されていた状態、ソ連とかユーゴスラビアがその典型ですが、そういった世界的な民族のアイデンティティの回復、つまり自分たちはイスラム教徒だということを非常に強く意識して、自分たちを規定しようとする動きがここ15年ぐらいの間に強く出ています。政治的な自分たちの規定をイスラムによってやろうとしているわけです。これは中国でも新疆省で反乱が起きた

という事件がありますが、旧ソ連、その他でも起きています。そういうものとしてイスラムが作用しているわけです。あるいはそれぞれの国や地域において社会・経済・政治の問題が起こった時に、民衆はその不満をどうやって表現するか。かつて社会主義や共産主義というイデオロギーが生きていた時代はそれに走った人も多くいましたが、もそれが役に立たなくなった今、一層イスラムを通じて何かを言うという傾向が強いわけです。それは宗教的なものをどうのというのではなく、社会を改善しろという要求をイスラムを通じて行うという意味です。

もう1つ大きいのは、工業化・産業化が進んでいく社会では、経済的に豊かになる反面、精神的・道徳的退廃が言われます。これはイスラム圏でも同じです。それを立て直すために、自分たちの持っているイスラムに戻り、道徳的なものの回復をはかろうとするわけです。発展途上国に行く道ばたにゴミが落ちていて大変汚い。それは本来は道徳だけの問題ではなく、社会的・経済的にそれを処理する能力がないからでもあります。そういった問題をイスラムを復興させることで回復しようと考えています。しかしその時のイスラムというのは、時代や地域、人によって違います。

時代・地域による「イスラム」の受け取り方の違い

現代社会では一般的に2つの傾向があります。1つはイスラムそのもの、純粹主義的なものを強調する考え方です。イランやスーダン、サウディ・アラビアなどがそうです。それに対してイスラムと現代社会を調和させ、あまりイスラムを表に出さない考え方をしているのがトルコです。トルコは1920年代からその考え方をとっています。同じくインドネシアもそうです。ここは選挙の過程でイスラムの政党が伸びているようですが、国全体では調和主義、近代主義をとっています。シリアも同様です。シリアはキリスト教徒が多い

るせいもありますが、宗教色を前に出さずにやっています。このように同じイスラムでも捉え方にかなり差があります。

物質主義的精神への反発

ではイスラムは共通に何を訴えているのかといえますと、物質主義的精神への反発です。つまり工業化社会・産業社会では「物を豊かに作り出すことが社会的に善である」ということが前提にあり、人々はそこに価値を見出し、それを追求するわけです。しかしそれでいいのか、人は物だけで生きているわけではないということを常に問いかけるわけです。コーランを読むとまさに同じ状況が、預言者ムハンマドが初めてイスラムを説いた頃のメッカに起きていました。商人たちがお金を稼いで、そのお金の力が人間の価値だと言っていました。それに対して神の最初の教えは、富や権力は本質的な救いにはならないというものでした。現代も金がある方が偉い、金そのものが価値だということに世界がなりつつあります。それに対してイスラムは非常に強く精神的な価値の回復を訴え、思想の面では現代のイスラム主義と言われるところの強調点であると思います。

現代ムスリムのかかえる矛盾：生活水準の向上と宗教性・倫理性の維持

しかし現実の世界にこれを当てはめると、現代のイスラム教徒たちが持っている矛盾にぶちあたります。イスラム教徒がたくさん住んでいる地域は発展途上国ですから、指導者も国民も自分たちの生活向上、経済開発を望んでいます。つまり豊かさを望みながら、一方では精神的な価値を守ろうとしている。まさに矛盾なのです。我々日本人はどうやってきたかという、それはみなさんよくご存じなわけで、物質的な豊かさはあるレベルまで間違いなく達成しましたが、今までに起きなかった問題が次々に起きて、この道徳的な退廃をどうしたらいいのか、この先どうなるのか、今の

日本を憂いている人は日本中にたくさんいると思います。我々日本人はイスラムのような宗教を持たなくても、そういうことを考えざるを得ません。ましてや宗教的な価値観を重んじる人たちにすればそれは大きな問題です。宗教性や倫理性はどうしたら維持できるのか。

エジプトにアハラム新聞という政府系の新聞があり、時々コラムに現代の退廃を嘆く記事が載っていますが、その嘆き方は大変なものです。しかし経済開発を国家運営の中心に置くと、人々はどうしてもエネルギーも精神もそこに集中してしまいます。これから先イスラムはどうなっていくのか。イスラム教徒は今まで外からのプレッシャーを自分たちを守るエネルギーにしていたましたが、今度は内側からもそれが出てきたわけです。もちろん外からの力は相変わらずあります。ヨーロッパの力はイスラムにとっては大きな脅威ですが、それだけではなく内側の危機にどう対処していくか。過渡的な現象として、そういった内外の軋轢によって政治的な過激派の動きが様々な形で出てくるわけです。これはどんなに短く見ても20年か30年は続くと思います。

そういった世界の矛盾を自分たちで引き受けて、その中で試行錯誤の苦闘を続けながら、もしかしたら精神的なつながりを大事にするウンマがある意味を持つのではないかと、それはイスラム教徒だけでなく外側の世界にも意味を持たせる可能性、またそれを発信できる力が、思想としてのイスラムの中にも文明としてのイスラムの中にもあると信じています。どうもありがとうございました。

第2部 質疑応答

池田 ありがとうございます。非常にわかりやすいお話でした。特にイスラムの宗教・思想・文明という3つの側面からのご説明には、私も一瞬はイスラムが理解できたような気がしました。しかし一元的な宗教であるという中で純粹主義と融合主義という両面があり、思想としてのイスラムには律法主義と神秘主義という違うベクトルがあり、文明としてのイスラムの中にも多様性と包摂的ではあるが、同時に非常に統一を志向するというお話を聞いていると、やはり一元的には理解できないのではないかと思います。

もう1つは、イスラムの主張は基本的には「人はパンのみにて生きるにあらず」と全く同じわけです。そういう点では問題は必ずしもイスラムが抱える固有のものではなくて、解答もまた世界全体に発せられているメッセージとしてとらえなければならぬということなのです。

これから質疑応答に入りたいと思いますが、まず最初に私から質問させていただきます。

1つは、一体イスラムには歴史の発展という概念はあるのかということです。コーランというのは神の言葉ですから、それが下った時点で世界は完結しているわけです。ですから、そこから後に発展していくという世界観ではないだろうと思いますが、そうだとすればイスラムは近代をどう考えているのか。歴史の積み上げで紆余曲折を経て発展してきた結果が近代世界であるという立場ではなく、コーランが下された時点で近代に到着しているわけですから、近代とどう折り合えるのかという問題です。

もう1つは経済開発と倫理性の問題です。物質的な豊かさと精神的な幸せの矛盾についてですが、たとえばキリスト教世界についてはウエーバーなどの「プロテスタンティズムの倫理と資本主

義の精神」で、信仰生活を全うすれば結果的に豊かになるんだという考え方がありました。私はこれは結果から見ただけの御用理論にすぎないと思っています。同じように今の東アジアの世界でも、NIESとかアジアタイガーズなどと言われる高度成長経済は、儒教的な遺産を背負った国のものである。儒教的な倫理、あり方の中に、経済的な発展のガイストがあるのではないかとよく言われます。これも私は後付けの議論だと思います。20～30年前は、儒教はアジア的停滞の象徴とされていたわけですから。イスラムは元々は商人が中心になってできあがった宗教ですから、他の宗教のように商業倫理との関連でイスラムの倫理性を突き詰めていくと結局は豊かになるんだという考え方は出てこないのでしょうか。

湯川 1番目の歴史の発展についてですが、イスラム教徒たちが考える歴史的に理想的な社会とは、預言者ムハンマドが自ら社会全体を指導していた最も初期の社会です。つまり宗教的な理想が社会的に活かされていた時代です。そしてそれ以降はそれが壊れていく歴史だと解釈しています。ですから時々それを回復しないといけないわけです。原理に戻るという意味で、原理主義という言葉を使うことがあります。そのように歴史を解釈していますから、歴史が発展するのではなく後退であり、後ろ向きに未来に進んでいることとなります。ある人はこれを「後ろ向きの前進」と言いました。これは大変な作業です。しかし前進という概念はあります。理想を再現するための発展はあり得ると考えています。

もう1つは、一神教はキリスト教もそうですが、人間を含めた全存在の歴史は始まりがあって終わりがあると考えています。終わりがあれば永遠の

発展というのではないわけです。その中である程度の発展はあったとしても、無限に続くことはない。その過程をイスラムは歴史の範囲内で発展と考えるわけです。それはイスラム化がどこまで進むか、全人類をどこまで覆っていくか。多分キリスト教も同じように考えているはずですが、世界をどこまで自分たちの理想で包み込めるか、その度合いを発展と考えるのです。そういう意味で、歴史の発展はある面では否定的に見るし、ある面では肯定的に見るといふことだと思います。もちろん近代に関していえば、ムスリムたちはそもそも発展の基は自分で作ったという自負心がありますから、多くの人たちは受け入れます。でもそれがヨーロッパの産物だという理由で心理的に抵抗する人もたくさんいます。自分たちが基を作ったのに、今はあいつらが威張っているというところで抵抗してしまう。積極的に受け入れる人たちは近代主義と言われますが、数から言えば今はそちらの方が多いと思います。このように近代との関係は非常に複雑なものがあります。

それから経済の問題ですが、必ずしもプロテスタンティズムが資本主義の始まりだとか、儒教によって日本を始め東南アジアが伸びたとは言いきれないと思います。メッカは商人の町であり、イスラムは商業倫理を聖典の中に含んだ形で発達した宗教です。しかし、これが近代的な経済システムに合ったものかどうかを検証するのは非常にむずかしい作業です。1つだけ言えるのは、イスラム教徒たちは経済的な豊かさと信仰は必ずしも矛盾しないと考えています。何がいけないかと言いますと、過剰がいけないとよく言われます。それはコーランの中に何度も出てきます。金儲けは人間の自然な行為であるが、過剰にそればかり行うのはよくないとしています。湾岸などに行くと過剰な人たちがいっぱいいます。そういう人たちはある種の人たちからすると敵に見えるわけです。イラクがクウェートに攻め込んだ時に、アラブ圏のイスラム教徒たちのある部分は喜びました。ク

ウェートは人口が少ないのに産油国ゆえに豊かで、その富を独占している。あれはみんなで分けるべきものであると。そこにイラクが攻め込んだから、手を叩いて喜んだわけです。これはもちろん貧しい者のやっかみでもあるわけですが、イスラムの宗教的な指導者の中にも同じ事を言う人がいました。過剰を慎むこと、しかし何をもって過剰とするか、それはコーランにも書いていないわけですから、その社会の中で判断していくことです。

今後の経済発展とイスラムを直接結びつけて論じることはむずかしいのですが、逆に言う「イスラムだからだめだ」という考え方、欧米の人たちは何か事件が起こると「イスラムだからだめだ」と言います。でも原理主義のような過激派は、実は欧米が作り出している面があります。経済発展に失敗すると、「1日に5回も礼拝をやっているからだ」と言うわけです。そういうふうに見て、ある意味では回りまわって世界銀行の融資にまでかかわってくるのです。ですから、イスラムと経済発展・政治的な安定がぶつかるのではないかという考えは、現実にくつかあったとしても、大きく見ればある種のフィクションとして機能しているのではないかと考えます。

池田 ありがとうございます。ではみなさまからのご質問をお受けいたします。

歌川 日本財団の歌川と申します。宗教としてのイスラムについて質問があります。イスラム教はユダヤ教に対する新興宗教であり、ムハンマドは異端のユダヤ教徒であったのと同様にキリストもそうでした。しかし、新興宗教が出てくるにはそれなりの本質的な理由があったわけですね。イスラム教はユダヤ教のどこがいけないとしたのか、同じくイエス・キリストがユダヤ教のどこがいけないとして分派を作ったのかについてお伺いしたいと思います。それに関連してヘレニズムの世界で、イスラムはギリシャのシビライゼーション、あるいは論理性を西洋のために抱いたわけですね。実

はソクラテスにもプラトンにもアリストテレスにも、ギリシャ哲学の中に絶対神があるわけですが、その神というものについてイスラムの人々はどう思っていたのでしょうか。異教徒だと思っていたのか、だいたい自分たちと同じだと思っていたのか、いかがでしょうか。

湯川 最初のご質問ですが、歴史的な順番ではユダヤ教、キリスト教、イスラム教ときていますが、当時ムハンマドが教えを広めたアラビア半島では特にユダヤ教徒との関係が深かったのです。メッカの町で宣教を始めた時、ムハンマドはユダヤ教もキリスト教も一体だと思っていました。しかしだんだんに違っていることを感じ始めたのでしょうか。メッカで迫害を受け、メッカの北、400キロくらいのところにあるメディナという町に弟子たちを連れて移りました。その町の人々はムハンマドの教えを受け入れてくれたのですが、アラブ人のユダヤ教徒たちは何かおかしい、自分たちと同じようなことを言いながら少し違うぞと言って受け入れない。ムハンマドはユダヤ教も同じ一神教だから受け入れてもらえると思っていたのに、実際はけんかになってしまったんです。

そのうちムハンマドはユダヤ教に選民思想があることに気がつきました。それまで礼拝する時の方向はエルサエムだったのですが、そういったユダヤ教の閉鎖性に嫌気がさし、メッカの方を向いて礼拝するようになりました。このようにだんだんイスラム的な特徴を付け始めます。たとえば断食の方法です。ユダヤ教徒は年間を通してばらばらと断食を行いますが、イスラムはまとめてしまいました。ラマダーン月の昼間の断食というように、儀礼上も変えていきました。しかし、ものの考え方自体はそのままです。繰り返し出てくることは、ユダヤ教徒のものの考え方は狭い、正しいけれども迷路にはまっているということです。

次にキリスト教はどうしてユダヤ教から離れていったかですが、ユダヤ教が本来の宗教としての救済から離れて、一種の形式主義、権威主義に陥

って人々の心を救えなくなったところに、キリストは人類へのメッセージとして愛を打ち出したわけですね。イスラムでもそれを認めています。キリストはいいことを言っていると。しかし神の子だと言ったことが間違っている。神に子供がいたらおかしいし、お母さんが人間なのはもっとおかしいというわけです。

それからヘレニズムの問題ですが、たしかにギリシャ哲学の流れの中には第一存在といったものがあり、それは唯一神に相当します。新プラトン主義の考え方はその存在が階層的に溢れ出てきて、地上にまで及ぶというものです。ムスリムの哲学者たちがそれらをどう考えたかということ、もちろんそれを神に置き換えて考えるとぴったりいくわけですが、プラトンについてもアリストテレスについても彼ら自身の宗教性は問いませんでした。彼らの思想・論理のみを研究し、どこまでそれを取り込めるかという形で受け入れたのです。

一方、哲学的な思想としてそれを突き詰めていった人たちもいます。アピセンナなどがそうですが、イスラム的な宗教性は薄らいで、哲学的な面だけを伸ばしていきました。ギリシャ人やヘレニズムが多神教かどうかは問わずに、いいところだけをうまく取り込んだと言えます。そこを問い始めるとギリシャの多神教の世界に踏み込んでしまい、取り込めなくなってしまうからです。同じ事はペルシャの伝統を取り込んだ時もそうですし、インドの伝統を受け入れた時もそうでした。宗教性は問わずに、成果の部分をどれだけ取り込めるかという形でやってきたのがイスラムの神学です。

水口 野村総合研究所の水口です。冒頭に十字軍の頃はヨーロッパの世界よりもイスラムの方が優越的だったというお話がありましたが、その後はヨーロッパを中心に経済が発達し、イスラム世界は停滞してしまったというのが我々の見方です。しかしイスラムの世界の人はそうは思っていないのか、どうなのか。またイスラムの世界のオピニ

オンリーダーク的な人、現代のイスラム世界について思想・哲学だけでなく、経済の諸問題まで含めて代表的な意見を言っている人は誰なのかというのが一点です。

第二点は、今後の世界を見る場合、非常に重要なのがイスラム世界と中国であるというのは定説ですが、片や大きな思想的な統一体であり、片や12億の経済を中心とした大きな力を持っている。これは文明の衝突ともつながると思いますが、その間にあって日本は、資源・エネルギー問題などを抱えながら右往左往する状況が続くのではないかと思います。お時間があればこちらのご回答もいただければと思います。

湯川 中東を中心にしたイスラム世界への侵攻は、一番最初はナポレオンの侵攻だと言われていますが、それより前にオスマントルコとヨーロッパ各国とのぶつかりあいがあって、18世紀末から19世紀には完全に押されるようになりました。一方インドもイスラム教徒が大変多いところですが、18世紀末にイギリスに支配されるようになりました。

その時イスラム世界ではどう認識されていたかという、自分たちは弱くなったということを非常に強く感じていました。十字軍時代から500年経ち、弱くなったという認識は19世紀頃からはっきりと持っています。ヨーロッパが強いだけではなく、自分たちは軍事的にも、政治的・経済的、あるいは文明の力としても弱くなったという認識です。そして、なぜこんなに弱くなったのかと必ず言うのです。それは500年の歴史の否定になるわけですが、内側に何か問題があるのではないかと考えています。その辺は経済開発にからんでまた出てくるかもしれませんが、そのように考えています。

次のご質問についてですが、代表的な20世紀の思想家として「ラシード・リダー」という人がおまして、ヨーロッパが攻めてきて大問題になった時に、どうしたら我々は活力を取り戻せるか

ということを幅広く論じました。他は各国にちらばってしまい、特に今これという人は挙げられません。ただ、1960年代に活躍した「サイド・クテップ」という人がいますが、「ラシード・リダー」よりは影響力が小さいし、イデオロギー的です。しかし問題意識は共通にあります。外との競争に勝つと同時に、自分たちも立ち直らなければならないという問題意識です。つまり自分たちを一度否定した上でやらなければならないわけですから、文明の力としては大変強い力だと思います。

それから次の問題は大きすぎて、池田先生にお返ししたいと思います。

池田 その問題は追々やっていこうと思います。時間の関係であとお一人のみとさせていただきます。

寺島 日本財団の寺島です。イスラムは神と個人が向き合う宗教だというお話がありました。またイスラムには聖職者がいないというお話もありました。しかし現実にはイランの聖職者ホメイニ氏のように、強い影響力を行使している人もいます。その辺のところはどうなっているのか、どう理解したらいいのかお伺いしたいと思います。

湯川 イスラムはいわば在家宗教だと言われます。イスラムという宗教の内側では非常にはっきりと聖職者を否定しています。聖職者の定義は社会的に言えば宗教を職業とする人たちであり、神学的には神と人間を仲介する人であると考えられています。なぜそういう存在を否定するかと言いますと、人間は神に直接対面すべきであり、間に誰かを入れてはいけません。またその人に人間を超えた能力を与えてはいけませんと考えられているからです。でも宗教ですから、モスクで金曜日の昼にみんなが集まってお祈りする際にばらばらにやってもさまにならないし、ろうそくに火を点ける人も必要です。やはり他の宗教と同じように、聖職者と同じ役割をする人は必要なわけですね。またイスラム法は成文法ではありません。つまりイスラム法という書かれたものがあるわけではないの

です。コーランを基に学者たちが考え、「私の書いたイスラム法学」というようなものがあるだけです。それでは一般の人はよく分かりませんから、指導する人が必要です。また神が1つというのは何か、などという質問にも答えなくてはなりません。これは普通の宗教では聖職者の仕事ですが、イスラム教にはそれがいません。誰がやるかというと、宗教的な知識（イルム）を持った人たち（ウラマー）が実質的に聖職者の役割をするわけです。イランのホメイニなどはその典型です。彼はなぜ偉いかというと、彼はたしかに僧侶階級の役割をしていますが、権威があるのはイランで最高の法学者であり神学者だと認定されているからです。いかにも聖職者のようですが、ローマ法王や大司教のそれとは違います。実質的に聖職者の役割をする人はいますが、制度として、また精神としては否定しているのがイスラムのあり方です。

おわりに

池田 我々の関心からいきますと、宗教としてのイスラムが純粹主義よりは融合主義に向かっているのか、どうなのか。また文明としてのイスラムが統一を進めるというよりは多様性をどこまで許容していくのか。そういった展望がありうるかどうか。そう言った展望が今後どうなるかどうかが今後の焦点になると思います。危機の時に純粹主義・統一志向が強くなるというお話でしたが、そうなってくるとイスラム世界全体にある経済開発に関わる危機と密接に関連していきます。それは、経済的な危機を脱しうるかどうかということと結びついてくるのではないかというのが私の印象です。本日はどうもありがとうございました。

付 録 (湯川教授講演レジメ)

第1回「イスラムと現代世界」資料

1. 宗教としてのイスラム

キリスト教・ユダヤ教との近親性—それゆえの敵対
「宗教」を越える宗教—宗教的倫理+社会規範
イスラム的なものの考え方—一元的思考 (タウヒード)

個人主義 (ムスリム) と共同体主義 (ウンマ) のバランス
純粋主義と寛容主義の両面

2. 思想としてのイスラム

律法主義的思想—神の法 (シャリーア) —ユダヤ思想との比較
ヘレニズム哲学的思想—アリストテレスの影響—神学と哲学の融和と対立
神秘主義的思想—神智学—自我の消滅—東洋思想との関連

3. 文明 (生活) としてのイスラム

普遍主義—エコロジカルに異なる地域とその文明伝統の取り組み
多様性—地域の生態と文化伝統の多様性の維持
統一性—ムスリムとしての連帯感・一体感←礼拝、巡礼
—独自性の主張—近現代における西洋中心の世界システムへのさまざまなレベルの反発を
イスラムを通じて表現

4. イスラムと現代世界

歴史的な発展—地理的拡大とムスリム人口の増大
近代の状況：植民地化の進行—現代の状況：開発途上地域
現代のイスラムの状況—歴史的なイスラム圏を越えてイスラム化が広がりつつある
—ヨーロッパのムスリム

世界の諸問題とイスラム—民族アイデンティティの回復、社会・経済・政治への一般的不満、
社会の道徳的退廃への危機感、等々

時代・地域による「イスラム」の受け取り方の違い
イスラム主義の主張—イラン、スーダン、サウディ・アラビアなど
近代との調和主義—トルコ、インドネシア、シリアなど

物質主義的精神への反発—現代イスラム主義の主張

現代ムスリムのかかえる矛盾：
生活水準の向上 (経済開発) × 宗教性・倫理性の維持

